

# 龍源寺報

80号

私たち曹洞宗は坐禅を第一におく宗派です。坐禅は「思いの手放し」と表現されることがあります。新型コロナウイルス感染症に関連した様々な事象が起こり、更にはこの中でいつ天変地異やいろいろな社会問題が起きてもおかしくない状況だと思えます。それぞれの本性が剥き出しになり、差別感情も生まれてきています。人の営みには常に不安がつきまとい、私には非常事態宣言中にお寺の境内入り口にある掲示板に、「不安な時ほど思いやりの心を大切に」と書きました。不安や不満が大きくなればなるほど「自分の中の自分」が肥大化してしまいます。他者のことが考えられなくなり、そうなる以上、今以上にギスギスした社会、更には社会の最小単位である家族のつながりにも影響が出てくると思います。結局はいろいろなことに影響をうけるこの私、この自分が自分にとって一番の問題になっていきます。

龍源寺では朝の暁天坐禅、希望者には夜の夜坐や日中の坐禅も行っています。昭和の禅僧、澤木興道老師のお言葉を借りるならば、「坐禅をしても何にもなら

## 坐禅のススメ



Instagramアカウント @shinkenzan1582



ん、普段なにかを求めてやまない私たちが何物をも求めないで行けるのが我々の無所得無所悟の坐禅です。なんでもない自分になっていくのが坐禅ともいえます。健康になりたい、成功したい、自分を変えたい、特別な光景をみたい、何か特別なことを知りたいなどなど、全てが坐禅からしたら余計な計らいです。そうした下心を持ち込まないのが坐禅という「行」であります。死ぬまでお付き合いしているこの「自分」と向き合っていきたい方々、一緒に坐禅を行ってみませんか？

興味のある方は電話(025-765-3055)、あるいは龍源寺インスタグラムのダイレクトメッセージでお受け致しております。団体、グループでの参加も可能です。ご希望があれば副住職出張坐禅も致しております。暁天坐禅は新潟県に非常事態宣言が発令されてから中止にしておりましたが、八月二日(日)の朝五時より再開致します。

※お寺では椅子での坐禅も可能です。  
※非常事態宣言等、緊急事態の際はいろいろな懸念が予想されるため、中止させていただきます。

新盆のお宅における  
棚経について

龍源寺ではお盆の期間、新盆のお宅をまわっています。これを棚経といいますが、十四、十五日の二日間をかけてまわりますが、新盆のお宅が多い場合は十三日の午後(主に秋山郷や旧中里村などの町外)もまわります。お仏壇をきれいにしてお盆の棚経に備えていただきたいところがございます。町外で遠方の檀家さまのお宅はまわれませんがご了承願います。

棚経という言葉の由来は、お盆にはお仏壇とは別に特別な精霊棚を作り、そこで読経されたことからきていると言われています。今でも秋山郷などでは精霊棚を作っているお宅が見受けられます。本来であれば全檀家をまわるべきところがございますが、近隣の精霊棚のお宅のみに限らせていただいております。そして今年より副住職の弟子の龍禅とともに棚経をさせていただきます。私も経験がございますが、本人にとっては大切な修行となります。温かい眼差しでお守りくださいましたら幸いです。以上、よろしくお願致します。



## 令和元年度 新潟県第一宗務所現職研修 於 龍源寺



暁天坐禅



朝課

### 寺職の隨筆

第4回

#### 浮き世と憂き世

浮き世、という言葉がありま。皆様はこの言葉から何を連想するでしょう。もともと中国では定めのない世の中、無常の世の意味で「浮世」、という意味の漢語であったようです。大陸から仏教の受容とともに漢字などの膨大な文化も流入した日本ではありますが、この浮世という言葉も意味が変容していき

が再転して、どうせままならぬ世なら、せめて浮き浮きと楽しくという気持ちを込めたのが近世的「浮世」の語義である。近世に入ると現実を肯定的に生き、利那利那を楽しもうとする風潮が一般にも広まる。そこで現在流行の風俗的なものに「浮世」という語を冠することになり。(浮世草子、浮世絵など)さらには遊里で遊びの意にも用いられた。



日本でも浮世、あるいは浮生という漢語は定めのない世の中、儂い人生を意味したが、平安時代に入ると、辛い世の中を嘆く心情が仏教的無常観と結びついて浮世という言葉が詠嘆的にとらえ、その訓読語の「浮き世」に同音の「憂き世」を当てて嘆かわしい現世を意味する用法が一般化し、その表出が和歌や物語の二つのテーマにもなった。それ

という変遷があったようです。興味深いのは憂き世という言葉との同化です。無常、という日本人は儂さ、と結びつけがちですが、本来は「常なるものは無い」、なので、「生じることも滅することもどちらも無常」です。常ならぬからこそ、生きる内容が大事なのではないかと日

頃感じています。この文章を書いている今(令和二年四月末)時点ではまさしく世の中は「憂き世」の状態。私の胸に去来したのにはあるインドの哲学者の言葉で「安定や安泰なるものはない」というものです。これは無常とという言葉にも通じると思いますが、その安定していないところに安住するのが安心ではないかと感じています。皆様はこの浮き世にどんなことを見出すでしょうか...? 私自身は義心が大切になつてくる、そのように感じています。

編集発行

曹洞宗 龍源寺  
深見山

〒949-8311 新潟県中魚沼郡津南町中深見乙1118番地 ☎(025)765-3055  
http://www.shinkenzan.com Instagramアカウント @shinkenzan1582

～七五三・赤ちゃん祈祷～



滝沢家の皆様



桑原家の皆様



富澤家の皆様

禪宗寺院には諸堂各所に様々な仏神が祀られています。その中でこの度、三体の尊像の修理がなされています。いずれも本堂ではなく庫裡に祀られている仏さまや神さままでございます。

鳥枢沙摩明王・跋陀婆羅菩薩・韋駄天、修理



仏さまの前で、「沐浴身体 当願衆生 心身無垢 内外光潔」と偈文を唱えながらお拜をしてから浴室に入ったことを思い出します。

庫裡階段設置

御寄付 割野 大平木工 様

龍源寺は昔の作りで段差に高さのあるお寺です。この度、本堂玄関工事と本堂庫裡にかけてのカーペット張り替え工事に際しまして、大平木工様から庫裡に階段設置の御寄付をいただきました。



馳走

ご馳走、といえば豪華な食事をイメージするかと思いきや、なぜ馳せるに走る、という漢字なのか気になったことがある方もいるのではないのでしょうか。実は仏教に由来する言葉なのです。

韋駄天走り、という言葉でも有名な韋駄天という神さまが禪宗寺院では祀られています。龍源寺でも飯台座と呼ばれている部屋に韋駄天さまがいらつしゃいます。

一説によると火の神・火天とも同視されたとのこと。そこで火を扱う庫裡に鎮火の護法神としてもその力を期待されたようです。

とされる若い僧侶が御供風呂と呼ばれるお風呂で身を清め、顔から足元まで全身白くくめ(なんと目も覆い隠すので前が見えませんが)で長い階段を駆け上がり御神殿にお供えしに行きます。



※参考文献 禅学大辞典